広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第34巻

男女共通必修に対応した家庭科教育内容の検討

小林　京子・三宅美与子

様々な社会状況を背景として、これからの家庭科教育が大きく変化していこうとするなか、本校でも来年度からの高等学校男女共通必修に伴い、被服室・調理室の改装、学習内容の検討と準備を進めている。そこで本研究では、中・高校生の家庭科の学習に対する意識、興味・関心を持っている学習内容などについて調査し、今後の内容検討のために生かしたいと考えた。調査の結果、家庭科は家事裁縫を学習する教科だという旧態依然としたイメージがまだ強く、学校での学習は不必要であると考えている生徒がわずかだがいるということ、また逆に、これからの家庭科に対して大きな期待を寄せている生徒も多数いるというようなことがわかった。これらの結果から得た課題をもとに、生徒の期待に応えるような学習内容を工夫し、創造していきたいと考えている。

1．はじめに

生徒たちの学校生活を見ていると、高校生として当然身についていなければならないはずの事柄が育っていない場面をたびたび見かける。時間になっても席に着かない、平気で遅刻する、おしゃべりが絶え間なく続くなど、マナーを守る・人に迷惑をかけないといった社会的生活習慣が身についていない。また、衣食住その他の事柄について自分のことは自分でするということや、人間関係を上手に保つなど生活上の技能も身についていない。このように人間としての自立ということが改めて問い直されている今日、男女を問わず、一人の人間として自己を見つめ直し、生活面ではもちろんのこと、社会的・精神的にも自立させていくことが家庭教育とともに学校教育においても大きな課題である。その中でも、生活と密接な関わりを持つ家庭科教育の果たさなくてはならない役割は大きい。

平成六年度から実施される新学習指導要領の中でも「家庭一般」の目標を、「衣食住、家族、保育などに関する基礎的・基本的な知識と技術を家庭経営の立場から総合的・体験的に習得させ、家庭生活の充実向上を図る能力と態度を育てる。」としている。男女が協力して家庭生活を営むために必要な衣食住、家族、保育などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させるとともに、国際化・情報化・高齢化など日々目まぐるしく変化している社会の中で、それらの変化に適切に対応し、主体的に生活ができる能力と実践的態度を育てるということが、家庭科教育に要求されてきている。様々な社会状況を背景としてこれからの家庭科教育に大きな期待が寄せられているなか、本校でも平成六年度からの男女共通必修に向けて、被服室・調理室の改装（被服室は従来の中高校生用としての２部屋の壁を除いて１部屋にする、調理室は調理台を４台から８台に増やす。）・学習内容の検討と準備を進めている。そこで、本研究では中・高校生の家庭科の学習に対する意識、および男女が共に学ぶ家庭科に対する意識、興味関心を持って学習したいと考えている内容などを調査によって把握し、今後の内容検討のための資料としていきたい。

2．調査方法

（1）時期　1993年5月

（2）対象　○広島大学附属福山中学3年生115名（男子54名、女子61名）

※　中学校において男女共通必修で技術・家庭科を学習している学年。

○　　同　　高校1年生90名　（男子44名、女子46名）

※　中学校において男女共通必修で技術・家庭科を学習し、高校になって女子のみ「家庭一般」を必修としている学年。

○　　同　　高校2年生89名　（男子44名、女子45名）

※　中学1年で相互乗り入れによって男女別学で「食物1」と「木材加工1」の領域を学習し、その後は男子は技術系列、女子は家庭系列の内容を学習し、高校では女子のみ「家庭一般」を必修としている学年。

尚、本校では六ヵ年一貫教育のため、高校1年生および2年生をそれぞれ4年生、5年生と表している。従って以後、4年生・5年生の表記はそれぞれ高校1年生・高校2年生を意味する。

（3）内容　家庭科の学習に関してのアンケート（資料1）

（4）方法　集団的アンケート

3．結果と考察

（1）家庭科の学習に対する生徒の意識

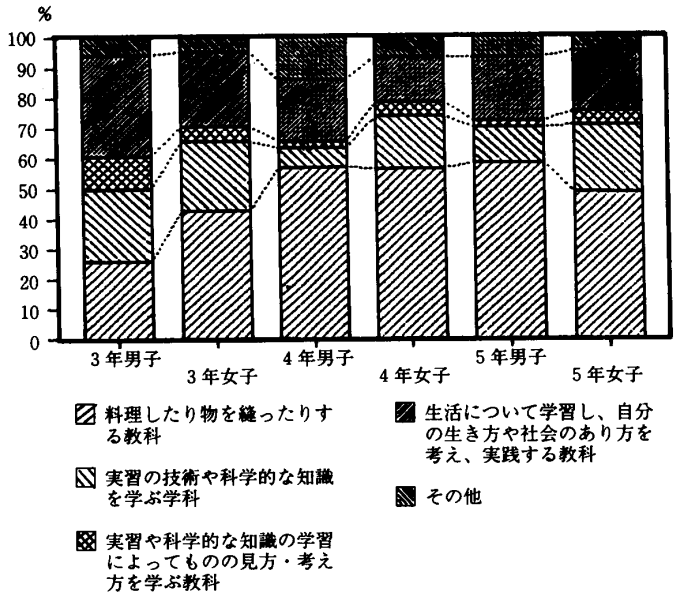

図1　家庭科の教科イメージ

図1は、生徒が家庭科という教科に対してどのようなイメージを抱いているかを表している。選択肢の中で、教師が授業を進めていくうえで目指しているものは「生活について学習し、自分の生き方や社会のあり方を考え、実践する教科」ということである。家庭科学習の経験年数の多い4年生や5年生の女子にこの回答が多くなるということを期待していた。しかし、「料理したり、物を縫っ

たりする教科」という回答が5割近くあるいはそれ以上を占めており、家庭科＝料理・裁縫というイメージが今だに強いということが明らかになった。その他の回答の中で、「今までのように女子だけの授業だと花嫁修業のための教科だ。」という答えがあり、ただ1人の女生徒の回答であったにも拘らず、女子だけが学習する家庭科というのは、私たちが考えていた以上に生徒の意識の中に家庭科という教科に対する歪んだイメージを植え付けていたのではないかと改めて感じさせられた。

学年別に見ると、中学校において男女共通必修で技術家庭科を学んでいる中学3年生、中でも特に男子の生徒の中に好印象を持っている割合が高く、男女共通必修が高校でも実施されるようになると家庭科に対する生徒のイメージも好転してくるのではないかと期待できる。

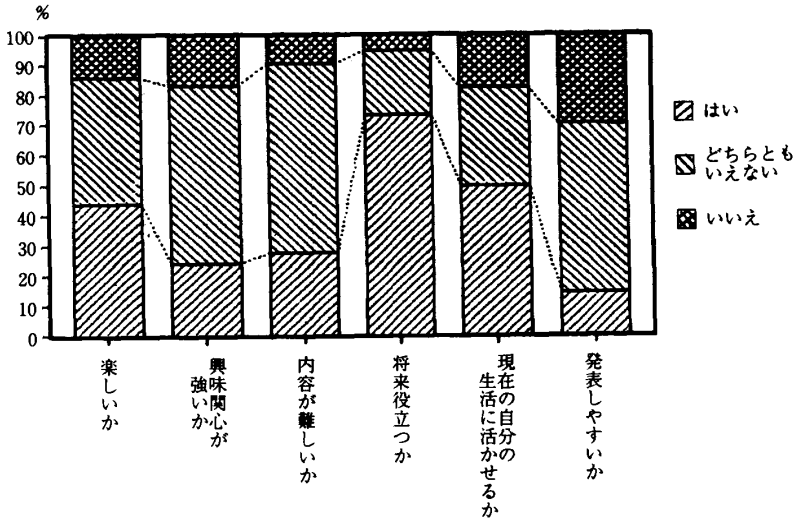

図2　家庭科の学習に対する感想

図2から窺えるように、家庭科の授業に対してプラスのイメージを持っている内容は、「将来役に立つ」が圧倒的に多く75％を占めている。次に、「現在の自分の生活に活かせる」が50％、「楽しい」および「どちらともいえない」との回答がほぼ同じ割合で、他の項目は、「どちらともいえない」が多くなっている。“将来役立つ”と考えられるが、“現在は活かせていない”というのは、一見矛盾しているようにも考えられるが、勉強や遊びに追われて自分の生活の世話は親任せという現在の生徒たちの生活状況では、活かしたくても活かす機会に恵まれないというのが本音ではないだろうか。マイナスイメージが強かった「内容が難しい」「発表しにくい」という点については今後我々教師が授業を展開していく際、改善していかなくてはならない大切なポイントである。つい先日も、授業の中で「家庭科のように生活と直結していてわかりやすい授業に集中できなくてどうするのか。」と話していると、「先生、家庭科は難しいです。」という声が返ってきた。教師は生徒の生活に関連のある身近な内容でわかりやすく説明しているつもりだったが、生活経験の乏しい生徒たちにとっては、反対に難しい内容になっていたのかもしれない。そういった教える側と教わる側の意識のずれを修正しながら、生徒にとって充実した授業展開を目指していきたい。

図3は、家庭科学習の目指すものを生徒たちがどのように捉えているかということを示している。全学年を通して、約半数の生徒が、「生活者として身辺の自立ができるようにする」という項目をあげている。家庭科の教科イメージを尋ねたときには「料理したり、物を縫ったりする教科」という答えが多かった割には、「生活していくための技術の向上を目指す」という回答の割合は少なかっ

た。これは、一つには生徒たちは、技術の向上を目指すというよりも生活に必要な最低限の技術を身につければそれで満足だ、という意識が強いということではないだろうか。また、現実に家庭科を学習していくなかで、技術が向上しているという意識はあまりなく、生活に必要な知識を得ているという意識のほうが強いのではないだろうか。これから男女共通必修に向けた具体的な内容を考えていくうえで、「家庭科は身辺の自立を目指す教科である」という生徒の期待に応えていくような学習内容を構成していかなくてはならない。

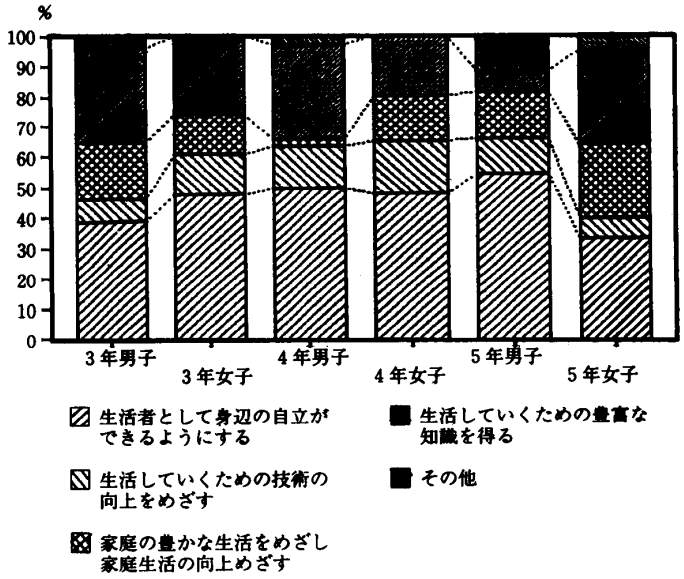

図3　家庭科の学習の目指すもの

図4－1～2の円グラフは、家庭科の学習の必要性について尋ねた結果を示している。男子では62.6%、女子で78.7%と半数以上の生徒は、「基本的なことは学校で学習しておきたい」と答えているが、男子で36.8%、女子で21.3%の生徒は「家庭で教わる方がよい」など、学校で学習する必要はないと回答している。やはり、ここにも家庭科＝料理・裁縫というイメージの強さが反映しているのではないかと考えられる。さらに、“学校での学習は不必要である”と答えた生徒たちに理由を尋ねてみると、“受験に不必要な教科であるからそういったゆとりがない”という回答が多いのではないかと予想していたが、そうではなくて“受験には無関係に不必要である”と答えた生徒が多かった。これから男女で共に学ぶようになっていくとき、これらの生徒の意識が少しずつでも変化していくように努力していきたい。

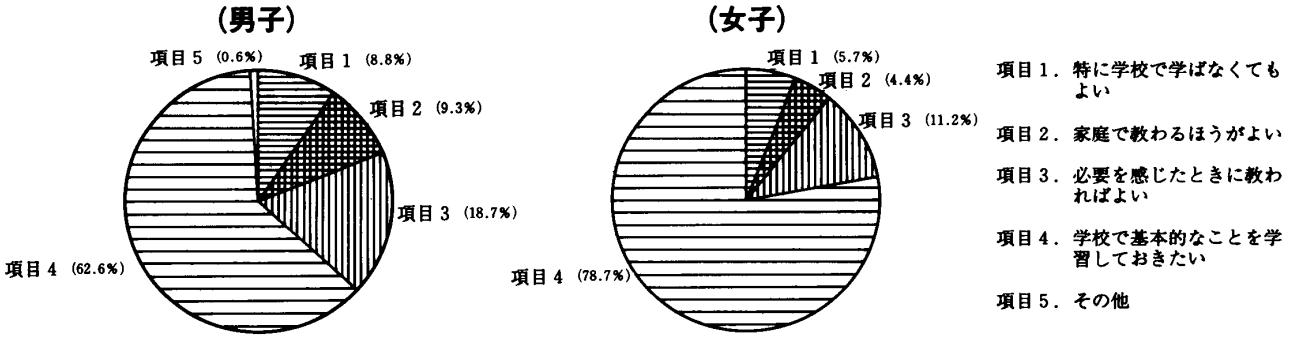

図4－1　家庭科の学習の必要性

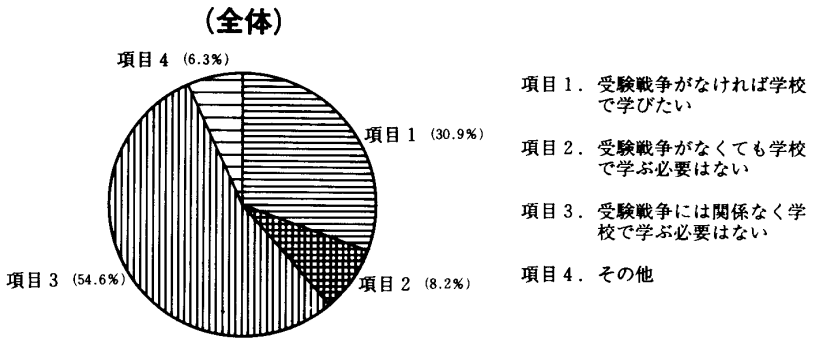

図4－2　家庭科の学習が不必要な理由

（2）男女で学ぶ家庭科に対する生徒の意識

図5－1～3は男女で学ぶ家庭科について生徒がどのように考えているかを示している。

図5－1より、「男女を問わず人間として生きていくうえで大切である」と答えている生徒が全ての学年で多く、70％～90％を占めている。また、どの学年も共通して男子よりも女子の方がその割合は高くなっている。多くの生徒たちが“家庭科学習は男子にとっても大切である”ということをよく認識していると言える。

また、図5－2より、「男女が一緒に家庭科を学習することによって、お互いの意見交換をすることができて有意義である」と答えた生徒の割合は、50％前後となっており、学年が進むにつれて少しずつ増加している。中学校の段階では発表者が男子中心になる傾向にあり、なかなか意見交換にまでは発展しにくいが、高校では男女それぞれの考え方が異なってくるような分野などもあり、教師の指導方法によっては大いに期待できる。

最後に、図5－3より、「男女が一緒に家庭科を学習することによって、将来の家庭生活に変化がある」と答えた生徒の割合は50％前後であるが、なかでも3年生の男子は約70％、女子は約60％と他の学年に比べて高い割合を示している。

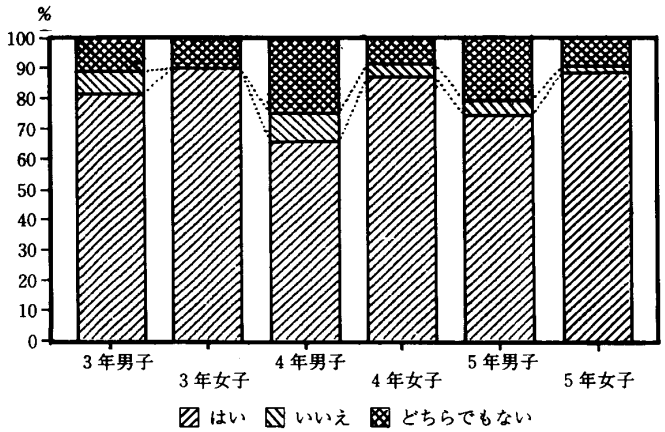

図5－1　人間として生きていくうえで大切

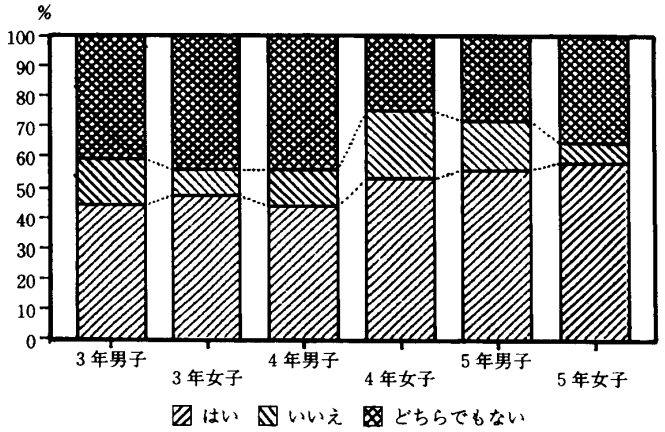

図5－2　お互いの意見交換ができ有意義

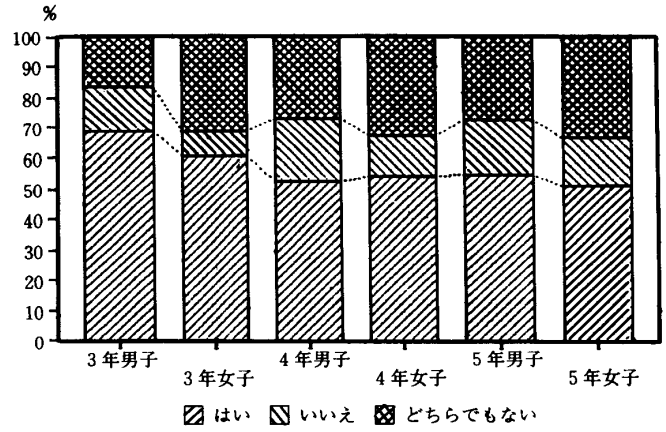

図5－3　将来の家庭生活に変化がある

以上のような結果から、これから始まる高校での男女共通必修の家庭科に対して教師のみならず生徒たちにも、社会の変化に対応して自分たちの生活にも変化が訪れてきているという予感や期待のようなものを感じ取ることができる。

（3）生徒が興味を持っている学習内容

項目別に見てみると、学年での大きな差は見られない。全体での割合の多いものから並べていくと、1位「食生活の設計と調理」、2位「衣生活の設計と被服製作」、3位「乳幼児の保育と親の役割」、4位「住生活の設計と住居」、5位「家庭経済」、6位「家族と家庭生活」という順位になった。男女ほぼ類似した傾向を示してはいるが、大きく異なっている点として、男子では2位に「家庭経済」があげられ、6位に「衣生活の設計と被服製作」があげられているのに対して、女子ではその順位が全く逆になっており、2位に「衣生活の設計と被服製作」5位に「家庭経済」があげられている。

次に、それぞれの項目での結果を示したものが表1である。同様に学年での差はほとんど見られなかったので、ここでは男女の差のみに焦点をあてている。住生活の項目で、男女の欄が空白になっているが、この項目においてのみ男女の差がほとんど見られなかった。

表1　生徒が興味を持っている学習内容

性別／項目	男女共通	男　子	女　子
家庭生活	• 生活設計 • 家庭経営の方針	• 家庭と法律	• 高齢者の生活と福祉
家庭経済	• 消費者信用 • 生活情報の活用	• 生産・流通と消費 • 消費者問題と消費者保護	• 家計の管理
衣 生 活	• 被服整理 • 日常着の着装	• 被服材料の特徴と選択	• 被服製作
食 生 活	• 日常食の調理	• 食品衛生 • 栄養素の働きと摂取の目安	• 食卓作法 • 食品の選択と取り扱い
住 生 活	• 室内整備 • 住居の衛生と安全 • 住生活の設計		
保　育	• 子どもの人間形成と親の役割 • 乳幼児の生活の世話	• 青少年の生き方と結婚	• 保育実習

全体を通して、男子の特徴としては、「家族と法律」「生産・流通と消費」などに見られるように家庭と社会の関連に興味を示しているということが窺える。それに対して女子の特徴としては、「家計の管理」「食卓作法」などに見られるように家庭内の仕事に関して興味を示していることが窺える。

男女ともに、「食生活の設計と調理」特に「日常食の調理」に興味を持っている、男女で多少興味・関心の違いが見られる。これは予想通りの結果とも言える。それぞれの興味・関心の違いは得意不

得意の違いということにも通じる。そういった観点でもこの結果を今後、参考にしていきたい。

（4）男女共通必修に向けての課題

以上のようなアンケート結果をもとにして、男女が共に学ぶ家庭科の内容を考えていくうえで考慮しなくてはならない課題を以下のようにまとめた。

① 家庭科は、将来一人の人間として自立していくために必要な教科である、という生徒の期待に応えるような、またそういった意識をより多くの生徒が抱けるような学習内容で構成していく。

② 中学校での男女共通必修に伴い、また家庭生活領域の学習を通して、生徒は家庭の仕事は男女の別なく家族が分担して行うことが大切である、という意識を持つようになってきている。高校の家庭科ではその意識をさらに高めて、家庭は男女が協力して築き上げていくものである、という姿勢を身につけさせていくことが大切である。

③ 時折生徒が授業の中で、「理科のようだ。」「数学のようだ。」とつぶやくことがある。他教科との関連が深い内容も多く、できるだけ他教科と連携をとりながら授業を進めていくことが大切である。また、他教科との関連を踏まえたうえで、家庭科の本質（生活との関わり）を見失わないように指導していく、他教科では難しい内容を実生活に即してわかりやすく、新たな発見のある内容になるように工夫していくことも大切である。

④ 学習させておきたい内容は多い。それを全て加えていくと時間が不足してしまい、中途半端に終ってしまう。それでは教える側も教わる側も一体何を教えたのか、教わったのかと不満足な後味を残して終わることになる。そこで、生徒が自立していくために最低必要な技術とは何なのか、将来生徒の生活に役立つものの見方、考え方、応用工夫していくための力などを身につけさせておくために必要な学習とは何なのかを考えて、指導内容を精選吟味する。

⑤ 多人数でなくてはできない、特別な器具や条件が必要である、日常あまり家庭では作らないなど、学校でしかできないような教材を選ぶ。また、ただ実習に終ってしまうのではなくその科学的意味や原因を明確にしていく、などして学校で学習することの楽しさ・充実感を感じさせることのできる内容にする。

⑥ 男女で得意な分野での教え合いを活発にさせるように工夫する、男女で意見が異なるような分野での討論会を設定するなどして、男女の興味・関心の違いがプラスとして生かされていくようにする。

⑦ いつの場合でも、実験・実習を豊富に取り入れて実際に確かめる、実際に体験できる場を設定していくことが大切である。特に教師が教えたい内容と、生徒が興味を持っている内容との間にギャップが見られるときには、生徒を活動させることに重点を置いて指導方法を工夫する。

（5）年間指導計画

以上のような調査結果及び課題に基づいて、平成六年度から実施する男女共通必修「家庭一般」4単位の年間指導計画を次のように考えてみた。

表2　年間指導計画

学年	週時数	一学期			二学期		三学期	
	週	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12			13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26		27 28 29 30 31 32 33 34 35	
1	2	衣生活の設計と被服製作 (24)			食生活の設計と調理 (28)		住居の機能と住生活の設計 (18)	
2	2	家庭と家庭生活 (8)	家庭経済と消費 (12)	乳幼児の保育と親の役割 (24)		食生活の設計と調理 (22)		ホームプロジェクト(4)

男女ともに最も興味関心が強く、将来の自立した生活のためにも一番教えておきたい内容の多い「食生活の設計と調理」を50時間とって高1および高2（4年と5年）の両学年で学習できるようにした。また、新学習指導要領でポイントが置かれており、現代の社会状況から必要が迫られている「家庭経済と消費」「乳幼児の保育と親の役割」については、今までより多くの時間を割り当てた。その分削減されたのは「衣生活の設計と被服製作」の項目である。これは男子に被服実習をさせていく場合、今までのように長時間かけて難しい作品を仕上げていくよりも、短時間で基本的なことを押さえた方が生徒の実態に合い、より効果的ではないかと考えた結果である。

それぞれの項目についての具体的な内容を以下に示した。（　　）内に時間数を示した。

衣生活の設計と被服製作　24時間

ア．被服の機能と着装　（2）
　○衣生活の現状
　○被服の機能
　○日常着の着装

イ．被服の選び方　（2）
　○被服材料の性能と選択
　○被服デザインの選定

ウ．被服管理　（3）
　○被服計画
　○被服整理

エ．被服製作　(17)
　○被服の構成
　○日常着の製作

食生活の設計と調理　50時間

ア．家族の食事と栄養　(10)
　○食物と食生活
　○栄養素の働き

イ．食品衛生　（5）
　○食中毒
　○食品添加物

ウ．献立と調理　(35)
　○食品の種類による特質
　○食品の選択と取り扱い
　○摂取のめやすと家族の献立作成
　○日常食の調理
　○会食と食卓作法

住居の機能と住生活の設計　18時間

ア．住まいとしての住居　（2）
　○住まいとは

家庭経済と消費　12時間

ア．国際的視野に立つ経済システム（1）
　○家庭経済と国民経済

○住居の機能
○住文化・住まい方
イ．今日の住居　（2）
○住居の構造
○住居の形態
○住宅事情
○住宅政策
ウ．住生活の設計　（4）
○生活機能と住空間
○住空間の配置
○住空間の広さ
○家族周期と住まい
エ．居住性と住居の管理　（8）
○住居の衛生と安全
○住居の管理
○室内整備の計画と美化
オ．地域と環境衛生　（2）
○環境保全
○資源の有効利用

家族と家庭生活　8時間

ア．家族の生活と家庭経営　（3）
○家庭生活の意義
○家庭経営の方針
○生活時間と労力の管理
イ．生活設計　（2）
○生活設計の意義
○ライフステージと生活設計
ウ．高齢者の生活と福祉　（3）
○高齢者の心身の特徴と家庭生活
○社会福祉とボランティア
イ．家庭の経済生活　（4）
○家庭の収入と支出
○家庭の経済計画（長期・短期）
○家計の管理
○税と福祉
ウ．消費生活と消費者としての自覚（5）
○消費生活の現状
○生産・流通・消費
○消費者信用
エ．生活情報の活用　（2）
○生活情報と消費生活
○生活情報の活用

乳幼児の保育と親の役割　24時間

ア．青年期の生き方と結婚　（2）
○人生と結婚
イ．母性の健康と母性保護　（4）
○母性の健康と胎児の成長
○母性保護の現状と課題
ウ．乳幼児の保育　(15)
○新生児の特徴
○乳幼児の心身の発達
○乳幼児の生活と世話
○家庭保育と集団保育
エ．子どもの人間形成と親の役割　（3）
○子どもの成長と家庭
○精神の健康
○家庭環境と親の役割

※被服製作の題材は現在検討中である。中学校でほとんど被服実習を行わない可能性があるということ、男女で興味・関心の度合いに大きな差があることなどを考慮すると、生徒の希望をいろいろな形で取り入れられる自由性を持たせたものである、将来最低限必要である技術的要素を含んでいる、完成の喜びを感じさせられる、などの条件を満足させてくれるものにしたいと考えている。

※食生活の設計と調理では、献立と調理に多くの時間を割り当てた。ここでは生徒の興味・関心が

強い日常食の調理実習を中心に据えて、食品の栄養上の特徴・調理上の性質などを実験・実習を通して学びとらせるように構成していきたい。

※住居の機能と住生活の設計では、生徒の興味・関心の強い住生活の設計や居住性と住居の管理を学習する前に「住まいとしての住居」「今日の住居」などの学習を通して科学的視点で住居を見直させ、単にイメージや感覚だけで住居を捉えないように配慮したい。

※家族と家庭生活では、家庭経営の方針や生活設計を考えさせるうえで、男女の意見を交換させたり「高齢者の生活と福祉」では時間内での実践や体験学習までは無理なので、長期休暇に入るまでに現状や問題点などに触れておいて、ホームプロジェクトの一つとして取り組めるように働きかけていきたい。

※家庭経済と消費では、様々な消費者問題が若者をターゲットとして起きているなかで、問題解決学習などを通して、消費者としての自覚と責任が高められるように指導していきたい。

※乳幼児の保育と親の役割では、青年期の生き方と結婚について男女で意見交換させたり、母性の保護や保育における母性と父性の大切さについて考えさせたりして、子どもを産み育てることが敬遠されがちな現代社会の中で、親になることの喜びや楽しさを伝えていくとともに、自分が育てられてきた過程を振り返る機会にもしていきたい。

4．おわりに

高校での家庭科男女必修が新聞紙上を賑わせ、様々な反響を呼んでいるなかで、不安と期待の入り交じった複雑な心境で平成六年度からの実施を迎えようとしている。家庭科の学習のなかで「なんで高校になっても家庭科をやらないといけないのか。」という中学生の声を聞くと、微かな不安が胸をよぎるし、「やってよかった。」「案外おもしろかった。」などの声を聞くと、期待でホッとする。今回この調査を行って、生徒たちもこれからの家庭科に大きな期待を寄せていることがよくわかった。「やってよかった。」「おもしろかった。」という声がだんだんと広がっていくように、また、家庭科＝料理・裁縫というイメージや家庭科は学校で学習する必要がないなどの意識を徐々に変化させていくように今回の指導要領の改訂をきっかけに、内容を精選工夫し、新たな家庭科の学習内容および展開を創造していきたい。

最後に、本研究のために御指導・御助言下さいました広島大学教育学部教授の佐藤一精先生と福田公子先生、さらにアンケートのデータ処理に際し御援助下さいました広島大学院生の橋本尚子さんと原田圭子さんに深く感謝致します。

参考文献

1）文部省：高等学校学習指導要領平成元年３月

2）櫛田眞澄：「教育学から見る家庭科男女共学家庭科の成功のために（１）」
家庭科教育　８月　67巻10号　家政教育社

3）大澤仁絵・小林京子：自主・自立を目指す家庭科教育
中等教育研究紀要　第29巻　広島大学附属福山中・高等学校

資料１

家庭科の学習に関してのアンケート

今まで、高等学校では女子のみが学習していた家庭科を、来年度より男女が共に学習する教科と改められたり、学習内容が改訂なされたりと、家庭科教育は大きく変わろうとしています。みなさんは、日頃の家庭科の学習に対してどんな意見を持っていますか。今後の家庭科の学習内容づくりの参考にしていきたいと思いますので、以下の質問に率直に答えてください。

（　　）年（ 男 ・ 女 ）

１、家庭科はどんなことを学習する教科だと思いますか。次の中からあなたの思いに最も近いものを１つ選び、記号に○印をつけてください。「その他」の場合は具体的に書いてください。

ア、料理したり、物を縫ったりする教科である。
イ、実習の技術や科学的な知識を学ぶ教科である。
ウ、実習や科学的な知識の学習によって、ものの見方・考え方を学ぶ教科である。
エ、生活について全体的に学習して、自分の生き方や社会のあり方を考え、実践する教科である。
オ、その他（　　）

２、家庭科の学習はどんなことを目指していると思いますか。次の中からあなたの思いに最も近いものを１つ選び、記号に○印をつけてください。「その他」の場合は具体的に書いてください。

ア、生活者として、身辺の自立ができるようになる。
イ、生活をしていくための技術の向上を目指す。
ウ、家族の豊かな生活を目指し、家庭生活の向上を図る。
エ、生活していくための豊富な知識を得る。
オ、その他（　　）

３、家庭科の学習内容は多分野にわたっています。全体を通してどのような感想・イメージを持っていますか。次のＡ～Ｆの中であなたの思いに該当するものを１つずつ選び、記号に○印をつけてください。

（Ａ）ア、全体的に楽しい　　イ、楽しくない　　ウ、どちらともいえない
（Ｂ）ア、興味関心が強い　　イ、興味関心がない　　ウ、どちらともいえない
（Ｃ）ア、内容が難しい　　イ、内容がやさしい　　ウ、どちらともいえない
（Ｄ）ア、将来役に立つ　　イ、将来役に立たない　　ウ、どちらともいえない
（Ｅ）ア、現在の自分の生活に活かせる　　イ、現在の自分の生活に活かせない
　　ウ、どちらともいえない
（Ｆ）ア、意見を発表しやすい　　イ、意見を発表しにくい
　　ウ、どちらともいえない

４、男女で学ぶ家庭科についてどう思いますか。それぞれあなたの思いに該当するもの１つに○印をつけてください。

（１）家庭科を学習することは、男女ともひとりの人間として自立して生きていくうえで大切だと思いますか。
　　ア、はい　　イ、いいえ　　ウ、どちらともいえない
（２）男女が一緒に家庭科を学習することによって、お互いの意見を交換することができて有意義であると思いますか。
　　ア、はい　　イ、いいえ　　ウ、どちらともいえない
（３）男子が家庭科を学習することによって、将来の家庭生活のあり方に変化があると思いますか。
　　ア、はい　　イ、いいえ　　ウ、どちらともいえない

5、家庭科の学習の必要性についてどう思いますか。次の中で該当するもの１つに○印をつけてください。

ア、特に学校で学ばなくてもよい
イ、家庭で教わる方がよい
ウ、必要を感じたとき教わればよい
エ、学校で基本的なことを学習しておきたい

ア～ウと答えた人は、下の項目の中から１つ選び、○印をつけてください。

ア、入試制度が変われば（受験戦争がなければ）学校で学びたい。
イ、入試制度が変わっても（受験戦争がなくても）学校で学ぶ必要はない。
ウ、入試制度には関係なく学校で学ぶ必要はない。

6、次に掲げた家庭科の学習内容に関して答えて下さい。

（1）あなたが興味を持って学習していきたいものを各項目毎に２～３つずつ選び、記号に○印をつけてください。

1）家庭と家庭生活に関すること

ア、家庭の機能　　イ、家庭の役割と人間関係
ウ、家庭と法律　　エ、家庭経営の方針
オ、生活時間と労力の管理　　カ、生活設計
キ、高齢者の生活と福祉　　ク、高齢者介護の実習

2）家庭経済に関すること

ア、家庭経済と国民経済　　イ、家計の管理
ウ、生産・流通と消費　　エ、消費者信用（クレジット）
オ、消費者問題と消費者の保護　　カ、生活情報の活用

3）衣生活の設計と被服製作に関すること

ア、被服の機能　　イ、日常着の着装（着方）
ウ、被服材料の特徴と選択　　エ、被服計画
オ、被服整理（せんたく・取り扱い）　　カ、被服製作

4）食生活の設計と調理に関すること

ア、食生活と健康　　イ、栄養素のはたらきと摂取の目安
ウ、食品の種類による特質　　エ、食品の選択と取り扱い
オ、食品衛生　　カ、家族の献立作成
キ、日常食の調理（実習）　　ク、食卓作法

5）住生活の設計と住居の管理に関すること

ア、住居の機能　　イ、住生活の設計
ウ、住居の衛生と安全　　エ、住居の管理
オ、室内整備

6）乳幼児の保育と親の役割に関すること

ア、青少年の生き方と結婚　　イ、母性の健康と母性保護
ウ、生命の誕生　　エ、乳幼児の特徴
オ、乳幼児の心身の発達　　カ、乳幼児の生活と世話
キ、家庭保育と集団保育　　ク、子供の人間形成と親の役割
ケ、保育実習

（2）1）～6）の項目について、あなたにとって興味・関心のある項目を選んで、項目番号に○印を記入してください。